

聖書：コリント人への手紙第一 16：13～18

説教題：一切のことを、愛をもって

日時：2023年3月19日（朝拝）

コリント人への手紙第一もいよいよ結びの部分となります。今日と次回で読み終えることになろうかと思えます。今日の箇所では最後の勧めが語られ、次回 19 節以降では終わりの挨拶が記されます。さて 13 節には短く 4 つの勧めが語られます。いずれも現在時制で記されていますから、常に継続的にそうあるようにという勧めです。一つ目は「目を覚ましていなさい」。つまり霊的にまどろんだ状態でいてはいけないということです。しばしばこの勧めは主の再臨のメッセージとセットで聖書に出て来ます。いつ主が来られても良いように目を覚ましていなさいと。そして確かに次回見る 22 節に主の再臨を待ち望む祈りが出て来ます。あるいは復活について語られた 15 章では、キリストの再臨の時に信者は朽ちない栄光の体をいただくことが言われました。しかしながらこの手紙全体ではキリストの再臨に関することは特別には強調されて来ませんでした。むしろ不道德な町コリントにある教会の様々な問題が取り扱われて来ました。そういう意味では自分たちを取り巻くこの世の誘惑に負けることがないように、この世の価値観に流されることがないように、霊の眼をしっかりとあけているように、というニュアンスの方が強いと言えるかもしれません。

二つ目は「堅く信仰に立ちなさい」。パウロは 15 章 1 節で「兄弟たち。私あなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです」と言いました。そして復活の教理について論じた後、最後の 58 節で「ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、云々」と言いました。ですから「堅く信仰に立つ」とは、この福音の教えにしっかりと立つことをまず意味するでしょう。そしてただ正しい教えを復唱できれば良いわけではありません。正しい教えに基づいて、キリストに信頼する信仰に日々生きる者でなければなりません。この世と調子を合わせず、目を覚まして正しい福音に立ち、その福音が指し示すキリストに日々より頼む歩みへと向かわなければなりません。

そして三つ目と四つ目は「雄々しく、強くありなさい」。雄々しくあれ、強くあれ、と聞くと、あのヨシュアへの言葉が思い起こされます。これは彼らが戦いのただ中にあることを思い起こさせます。コリント人たちは異教文化のただ中にありました。偶

像礼拝や不道徳が彼らの周りに満ちていました。そういう中で信仰に堅く立ち、確信と勇気をもって、雄々しく、強く戦う歩みが勧められています。

それに加えて14節にもう一つのことが言われます。「一切のことを、愛をもって行いなさい」。これは前の4つの命令に並ぶものというよりは、それと区別され、より強調される形となっています。パウロの他の手紙と比べて思うことは、このような愛の命令が手紙の最後に記されるのは珍しいということです。なぜこの手紙ではここで「愛」が強調されるのだろうかと考えて思い起こされるのは、この手紙には13章にいわゆる愛の賛歌があったということではないでしょうか。そのような手紙の最後に、こうして「愛」の勧めがもう一度出てくるのは自然であり、むしろこれがこの手紙の重要なテーマであったことを改めて思い起こさせてくれます。それどころかこの後の部分にさらに2回も「愛」に関する言葉が出て来ます。詳しくは次回見ます(22節、24節)。こうしてみると明らかにこの「愛」というテーマは、この結びの部分で改めて強調されていると言えます。

考えてみればコリント教会の多くの問題は愛の欠如によるものでした。手紙の最初の方で見た教会内の分裂・分派もそうでした。その後に出て来た互いに法廷に訴え合う訴訟問題も然り。その後の結婚問題、あるいは偶像に献げた肉を巡る知識の誇り合い、愛餐の席に現れた富める者と貧しい者との分断、また賜物を互いに比較し合っただけの競争・見下し合い、……。パウロはそんな彼らに、はるかにまさる道としての愛について語りました。愛がなければすべてはむなしく、役に立たないと。私たちのすることすべてに意味と価値を与えるのは愛によってそれがなされているかどうかであると。コリント人は知識や知恵を誇っていましたが、パウロは8章1節で言いました。「しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」

このような愛についてのこの手紙のメッセージをもう一度まとめる仕方で、ここで「一切のことを、愛をもって行いなさい」と語られていると考えられます。ここは直訳すると「あなたがたの一切のことが、愛において生じるようにしなさい」となります。ただ「一切のことが」というと他人事のようにも聞こえますが、言われているのは「あなたがたの一切のこと」です。私の言動のすべて、私の話すこと、私の行うことのすべてが、例外なく愛から生じ、愛においてなされるようにとされています。これこそコリント教会で生じていた多くの問題の治療薬です。一人一人が自分のすべ

での行動を愛において行うなら問題は解決します。そのように生きることこそパウロがこの手紙で求めて来たことですし、そのような人こそキリストに似る人、また真に霊的な人、御霊の人なのです。

この勧めと関連してでしょう、続く 15 節以下にはステファナの一家のことが触れられます。この一家について 1 章 16 節にこう記されていました。「もっとも、ステファナの家の者たちにもバプテスマを授けましたが、そのほかにはだれにも授けた覚えはありません。」 その少し前にクリスポとガイオにパウロは洗礼を授けたと言っていますが、ステファナの一家はその二人と並んでパウロがコリントで洗礼を授けたごくわずかな人々でした。その一家についてここに「アカイアの初穂」とあります。これはこの一家がコリントでの最初の回心者であったことを示すのでしょう。ちなみにアカイアと呼ばれる地方には、パウロがコリントに来る前に宣教した町アテネも含まれます。そのアテネではわずかながらも回心者が与えられたことが使徒の働きに記されていますので、厳密な意味でのアカイアの初穂はアテネの回心者ということになるかもしれません。しかしコリントはアカイアを代表する都市です。ですからパウロはここでアカイアと言っていますが、その意味はこの地方中心の「コリントにおける」という意味であったと思われます。あるいは一家が丸ごと救われたケースとして、ステファナの一家はアテネを含めたアカイアの初穂であったということかもしれません。いずれにしてもコリント宣教を振り返り、コリント教会を思う時に、パウロが深い感謝をもって思い起こしたアカイアの初穂はこのステファナの一家でした。この一家が初穂となり、それに続くコリント教会の形成と歩みが導かれて行ったのです。

そして特に注目すべきは、この一家が「聖徒たちのために熱心に奉仕した」と言われていることです。ここの「奉仕」という言葉は「執事」と関係する言葉です。この一家は聖徒たちのために、教会のために、身を低くして仕えてくれました。様々な世話をしてくれました。ギリシャ語では自分自身をそのようにささげたという言い方がされています。つまり彼らは自発的に自らをそのような奉仕にささげたのです。

16 節を見ると、ステファナの一家がその奉仕の中心であったけれども、その他の人々のことも覚えられていることが分かります。この一家とともに働き、労苦している人々です。「労苦」という言葉に示されていますように、現実には様々な苦労がそこにはありました。それを一緒に担って奉仕している人たちがいました。パウロはこの

ような人たちにあなたがたも従いなさいと言います。仕えてくださっている人々を見て何とも思わず、ただその人たちに奉仕をさせて、自分たちはその上にあぐらをかいているようであってはならないと。仕えてくれている人たちに従いなさい。その人々に感謝し、その人々をサポートし、むしろその人々の下に入って、あなたも一緒に仕える者となるように！とされています。

ここに教会はどういう人に目を留め、尊ぶべきなのか、パウロは大切なことを語っています。コリント人は自分を持ち上げることに熱心でした。知恵や知識を誇り、もっと高い社会的地位、社会的評価、そして豊かな生活を求めて互いに競い合い、争っていました。しかしパウロは聖徒たちのためにこのように自らをささげて奉仕している人にこそ注目し、従いなさいと言っています。これは14節の「一切のことを、愛をもって行いなさい」という勧めにつながるものであり、またこれを一層強めるものとなっているのではないのでしょうか。他者の益のために心を配り、へりくだって仕えている人々、そのような人にこそ目を留め、感謝し、尊ばなければならない。その人々は自発的にそうしているんだから、それでいいのだと言って甘えたままではいけない。共同体の生活の陰では人の目に見えないようなところで長い間、労苦している人々がいます。その人たちに目を留めて、その人たちに従いなさいとパウロは言うのです。

17節にはステファナとポルトナトとアカイコが出て来ますが、ステファナは今述べた人と同じ人のことでしょうか。おそらくこの3人がコリント教会からの手紙をパウロに届けた人たちであると考えられます。またこの3人がこのコリント書をコリントへ運んで行った人たちであると考えられます。ポルトナトとは「祝福された人」あるいは「幸運な人」という意味で、アカイコは「アカイアの人」という意味のようです。この二人はステファナの家族だったのか、あるいはその家のしもべだったのか、詳しいことは分かりません。しかしこの3人が来てくれたので「私は喜んでいます」とパウロは言います。「あなたがたがいない分を、彼らが埋めてくれたからです」と。ここにコリント教会に対するパウロの愛情が再び吐露されています。当時は今日のように電話やメールで相手の状況をすぐ知ることができるわけではありませんでした。パウロはコリント教会のことがずっと心にかかっていた。そんな中、この3人が来てくれました。それはパウロにとってコリント教会全体と会うことができたような出来事でした。そしてコリント教会について多くのことが知ることができました。その中

にはこの手紙で取り上げたような問題も含まれていましたが、悪いことではなかったのでしょうか。18 節に彼らは私の心を安らがせてくれたとあります。パウロは彼らに接して、その心がリフレッシュされ、喜びと励ましが与えられたのです。私たちも長い間、様子を知ることができなかった兄弟姉妹についてのニュースを知ることができた時、しばしば安堵し、慰められ、力を与えられることがあります。パウロもそのような喜びを得たのです。また自分の心だけではなく、あなたがたの心も安らがせてくれたとあります。この3人は、こうして双方向に祝福をもたらす働きをしてくれました。そこでパウロは最後に言います。「このような人たちを尊びなさい。」 このステファナとポルトナトとアカイコはこのために骨折ってくれました。色々な気遣いをしながら時間と労をささげてくれました。このように仕えてくれている人々を尊びなさいと言われていきます。これは「認めなさい」という意味の言葉です。認識しなさい、つまり高く評価しなさいということでしょう。コリント人たちはエリート志向の考えを持ち、低くなって仕えるより、自分が高い地位に上ることを求めています。そんな彼らに、どういう人たちに目を留めるべきかということのパウロは語っています。このような人たちを尊びなさいとパウロは言います。そういう人たちに心からの感謝を表すようにということでもあるでしょう（第3版：「このような人々の労をねぎらいなさい」）。

果たして私たちはどうでしょうか。教会の存在するところどこにでもこのような方々がおられると思います。その方々の奉仕によって一つ一つの教会の歩みは支えられています。私たちの教会も同じであると思います。ステファナの一家のように聖徒たちのために熱心に奉仕してくださっている方々。またともに働き、労苦してくださっている方々。また人と人とをつないで私たちの心を安らがせるための働きをしてくださっている方々。そのような人々に目を向けず、評価もせず、ただお世話になり、それを当たり前のように過ごして、仕えさせたままにしてはならないということです。パウロはそのような人々に「従いなさい」、またそのような人々を「尊びなさい」と言っています。この言葉に導かれて私たちも改めて見るべき人に目を留め、その方々に感謝し、その方々を重んじる者たちでありたいと思います。また私たち自身がその方々に見習って、そのように歩む者たちでありたいと思います。パウロはこの手紙の結びに当たって「一切のことを、愛をもって行いなさい」と言いました。私たちがこのように歩むのは何よりも私たちの教会のかしらキリストがそのように歩んでくださったからです。そのキリストに心から感謝しているからです。そのキリストに導か

れて私たちに先立って仕え、奉仕してくださっている兄弟姉妹方がいます。その方々に目を留め、自らもその方々に従い、他者と教会の益のために仕える歩みへと進む者でありたいと思います。その歩みを通してキリストへの感謝を表し、神の栄光を現す歩みを御前にささげる者へ導かれたいと思います。